

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18330147
 研究課題名（和文） 児童青年の対人関係障害に対する多次元のアセスメントによる理解と援助
 研究課題名（英文） Comprehension and support by multidimensional assessment for children and adolescents with the problem of personal-relationship
 研究代表者
 高橋 靖恵（TAKAHASHI YASUE ）
 京都大学・大学院教育学研究科・准教授
 研究者番号：90235763

研究成果の概要（和文）：

本研究では、対人関係において問題を抱える児童・青年に対して、その心理的援助を適切に行うための多次元な心理アセスメントの考案と実践現場のニーズに見合ったフィードバックの検討、心理療法のプロセスも含めた総合的考察が目的とされた。

その結果、児童に対してはギリシアで開発された Fairy Tale Test (FTT) についての日本での施行方法と意義の検討をおこなった。また、国際的視野に立って、青年期の対人関係理解及び診断困難事例に対する心理アセスメントの実施、心理療法のプロセスとの総合的検討を行った。

研究成果の概要（英文）：

On this study, we aimed to consider with all facts of device of multidimensional assessment for children and adolescents with the problem of personal-relationship, discussion of feedback which is suitable for practical needs, and process of psychotherapy.

From a result, we discussed about how to carry out and importance of FTT, which is invented in Greece, for children in Japan. Also we had comprehensive discussion with a global view about carrying out of assessment and process of psychotherapy for understanding of personal-relationship of adolescents and the case of difficult diagnosis.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2007年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
総計	11,600,000	3,480,000	15,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：臨床心理学・心理アセスメント・児童期、青年期・対人関係障害・心理的援助

1. 研究開始当初の背景

近年若年層の青年による人命に関わるような重大事件について報じられ、同時に子育てにおける諸問題として虐待事件等、子どもが適正な対人関係を育めない環境についても問題視されてきている。さらに、研究代表者が臨床心理士としてかかわる医療機関や、大学院の附属施設である心理教育相談室、また大学の学生相談レベルにおいても、対人関係上の悩みや問題、さらにはそれに端を発して、自傷行為や摂食障害など複合的な問題を呈する青年が後を絶たない。これらの問題は、多分に問題行動に発展する危険性をはらんでおり、早期に発見し、医師による治療及び心理療法による対応が必要である。筆者らは、これまでの研究によって、解離症状や問題行動の発見に関わる心理アセスメント技法を発展させてきた。これをふまえてさらに、従来の心理診断システムでは、適切な判断が難しい障害を抱えた、児童や青年に対し、より適切な多次元的心理診断技法を適用していくことを展開させていきたいと考える。そして、それを心理的援助につなげていく実践的な活動への寄与を重視して、進めて行くことが、現代日本において求められる研究と考えた。また本研究は、すでに科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号 15530454 研究代表者 高橋靖恵)「変貌する青年期の心の問題と家族に関する研究—多発する問題行動の予防と対策—」において、筆者らが発表を行った研究をさらに多角的に、国際的に発展させ、実践的にも有効性を高めるように計画されたものである。

2. 研究の目的

これらの背景を念頭において、幅広く対人関係上および行動上の問題を抱える青年たちへの適切な心理アセスメント及び心理的支援を行っていくプログラムを構築していくことが本研究の目的となる。

また、このような臨床心理学の領域における心理アセスメントについての検討は、従来盛んに行われていたものの、現在では、心理療法の技法や事例検討の研究が主流となり、焦点を絞った、しかも現実的な心の問題のニーズに応えた研究の発展は明らかに数が少なく、診断の困難な事例や問題の複雑化を鑑みると、研究として必須の領域と考える。そこで、本研究では、当初以下の3つの視点から、研究を進めていくことが計画された。

(1)対人関係上の問題を抱えた児童、青年たちに対する Fairy Tale Test(以下 FTT) について日本語版の検討を含めて、従来の投映法

や行動観察法、親からのアセスメント等を超えた多次元的なアセスメントを開発し、より適切な心理診断法の開発及びそれに基づく彼らへの深い次元での理解と援助法について検討する。

(2)これまで進めてきたロールシャッハ法による対人的コミュニケーションの理解を中心とした、思考・言語カテゴリーの発展の集大成を行い、幅広い心理臨床現場での利用可能な状況へ展開させる。より詳細には、心理臨床場面での対人的な問題、及びそれにまつわる問題行動を抱える事例を中心に、さまざまな視点から、ロールシャッハ法及び描画法などの投映法による理解と展開を行っていく。特に、今回は、強迫性障害やさまざまな行動化を呈する症状を抱える青年たちを対象として検討を重ねていく。

(3)発達障害及び高機能自閉症、アスペルガー障害などといった、生得的に対人的コミュニケーションの重篤な問題を抱えた青年たちへも、より適切な心理アセスメントの実施、適切な治療や教育を受けられるようなシステムの構築、より深いレベルの理解と援助を目指す。

つまり本研究では、その対象もそれぞれの目的に応じて異なり、これを総合することで、より多角的な問題の理解が可能となる。(1)では、健常者を中心とした研究→現代の児童、青年の対人関係の諸相についての理解が可能。(2)では、神経症圏の問題やパーソナリティ障害を抱えた青年を中心にした研究→現代におけるそのような問題を抱える青年の増加や問題の複雑化についての適切な理解と心理臨床現場のニーズに即した研究の展開。(3)では、生得的に対人関係障害を抱えた児童、青年に対する適切な理解と援助法の検討を行うことが中心となる。

これらのビジョンを持って研究をすすめてきた結果、さらに、(4)として、対人関係の問題を抱える青年に対しての心理アセスメント、心理的援助、家族支援のために、健常者からの連続線上の理解という、幅広い視点での研究が発展した。つまり、現代の健常青年が対人関係において抱く内的な感情にも目を向け、対人関係上の悩みや対人的距離感などの理解から、再び悩みを抱える青年たちへの支援へと検討が進められていったのである。

3. 研究の方法

(1)「FTTの日本語版の検討」：2006年度、小学生に協力者を得て、予備的検査を実施し、自主シンポジウムを主催し、協議を行った。

2007年7月にA市内小学校において本格実施。その結果に基づいて、創案者のCarina Coulacoglou博士とアテネにおいて研究検討会議を行い、日本心理臨床学会ポスター発表を行った。2008年度広汎性発達障害を抱える児童に対して試行、その成果を国際学会にて発表、複数の国のデータによるシンポジウムに参加した。その後、さらに本邦での実施の有効性について、多角的な検討を継続してきた。

(2) 青年期の診断困難事例に対する心理アセスメントの実施、心理療法のプロセスとの総合的検討：2006年度資料収集のため、第5回国際家族心理学会に参加。2007年度、摂食障害、解離、自傷などの問題を抱える青年の心理アセスメント及び青年とその家族との心理療法過程についての詳細な検討を行った。我々の研究経過とその成果の国際的な意義について、Anne Andronikof博士（国際ロールシャッハ学会会長）と協議し、今後の課題等を明確にすることができた。2008年度、「家族のライフサイクルと心理臨床」を企画した。2009年度は、さらに対象者の幅を拡大し、臨床心理以外の他領域の専門からとの協議を重ねて、早期発見、予防への展開を試みた。

(3) 広汎性発達障害を抱えた青年たちへの心理アセスメント：2006年度、これまでの知見に加えて、新たな事例の協力を得てロールシャッハ法の実施を行った。2007年度、日本ロールシャッハ学会において成果発表。上記の国際ロールシャッハ学会会長との討議によって、さらにその知見の拡充に努めた。2008年度以降は、予防的な知見という視点から、上記研究目的(2)とあわせて、検討を進めていく方法論を選択した。

(4) 現代青年の対人関係における内的感情及び問題行動の理解と心理的援助：上記の(1)～(3)までの検討をふまえて、本研究期間の後半に計画され、実施された。青年期のさまざまな内的感情について、量的分析、投映法などの質的分析の両側面から分析した。そしてさらに、それらの知見を臨床実践活動への応用を行った。その手続き、方法論については、学会の研究法セミナーでの講義の依頼を受け、それを行った。

4. 研究成果

上記の(1)～(3)、さらに(4)を研究年度に沿って概観し、以下にその概要を記述する。
<2006年度>

(1) ギリシアCarina Coulacoglou博士によって開発されたFTTについての日本語版の検討（研究1）：7月、8月に予備的に検査を実施した。筑波大でのデータと九大のデータ

を持ち寄り、9月に日本心理臨床学会にて、筑波大学小川俊樹先生らと共に、自主シンポジウムを主催し、貴重な意見交換を行った。11月には福岡にて研究打ち合わせをし、その結果をCarina Coulacoglou博士と協議した。さらにそれをふまえて、翌年3月、筑波大学にて日本での本格実施に向けて詳細な研究計画の検討会議を行った。

(2) 青年期の診断困難事例に対する心理アセスメントの実施、心理療法のプロセスとの総合的検討（研究2）：青年期の対人関係、特に家族関係の問題理解とその心理的援助の資料収集のため、国際家族心理学会に研究代表者、分担者の松崎及び研究協力者が参加し、貴重な資料を得た（5th Meeting in Cardiff, Wales：The International Academy of Family Psychology）。本大会には多数の国が参加され、それぞれの国、地域が抱える問題を家族という視点で捉えると、移民など歴史、文化と経済の深く関わる問題、新生児期から思春期にわたる子どもの縦断的な発達と親子関係の問題、特にリスクの高い家族の問題など様々な視点が浮き彫りにされ、研究において広く視点を持つことの重要性を再認識した。さらにロールシャッハ法の思考・言語カテゴリーの研究については、翌年3月に研究打ち合わせ会議を開き、今後のまとめ方などについて協議した。

(3) 広汎性発達障害を抱えた青年たちへの心理アセスメント（研究3）：これまでの成果をまとめ直して、学術論文として投稿を行った。さらに、新たな事例の協力を得て、ロールシャッハ法の実施を1月に行った。また、研究代表者以外の研究分担者、研究協力者によって研究資料の収集も積極的に行われた。日本芸術療法学会第3会大会（9月2日～3日）には、研究分担者の高橋昇が、日本ロールシャッハ学会第10回大会（11月18日～19日）には、研究協力者の吉田加代子、富田真弓がその役割を担った。

<2007年度>

前年度の流れを踏襲して、研究(1)～(3)という形でまとめ、先の目的に掲げた研究(4)を追加してまとめていく。

研究(1)：日本でのFTTに関する適用の研究のために、7月に研究協力者と共に協力承諾を得た小学校において実施した。多数の研究協力者と、小学校に多大な協力を頂き大変貴重な機会となった。

それらのデータと筑波大学グループのデータをもとに、FTT創案者のCarina Coulacoglou博士と、アテネにおいて、日本の小学生の特徴および日本での適用可能性について、研究検討会議を行った。さらにそ

の成果を日本心理臨床学会において発表した。FTT 自体は大変興味深いアセスメントツールではあるが、素材としている物語が、日本文化における「なじみ込み」という点で、本邦の小学生の心理アセスメントとして有効であるかどうかはまだ確証できない段階であった。

研究(2)：現代青年の対人関係の在り方に関する理解を深め、さらに青年期の対人関係障害及び診断困難事例への理解を深める作業を進めていった。摂食障害、解離、自傷などの問題を抱える青年の心理アセスメント及び青年とその家族との心理療法過程についての詳細な検討を行い、研究代表者を中心に日本家族心理学会、日本心理臨床学会で成果発表を行った。また、我々の心理アセスメントに関する研究経過とその成果の国際的な意義について、パリX大学を訪問し、Anne Andronikof 博士(国際ロールシャッハ学会会長)と協議し、国際的にも本知見が有効である旨のサポートを得て、今後の課題等を明確にすることができた。

研究(3)：広汎性発達障害等の問題を抱えた青年の心理アセスメントについて、昨年度実施した成果とさらに新たな知見も加えて、日本ロールシャッハ学会において成果発表を行った。中でも、従来ロールシャッハ法の知見として述べられてきた心理的な距離感について第三の視点(本事例群における知覚的距離感の喪失)を提供した。この成果についても、パリX大学、Anne Andronikof 博士(国際ロールシャッハ学会会長)との協議を行った。次年度の国際学会での成果発表を期待され、今後の研究展望が拓かれた。

研究(4)：現代青年の対人関係における内的感情及び問題行動の理解と心理的援助

健全青年の対人関係における内的な感情理解として、研究協力者と共に、対人関係上の心理的距離の問題や罪悪感などについて分析、検討を行った。これらのデータを含めて、本研究で用いて来た手法である質的分析、投映法について、日本青年心理学会の研究セミナーを依頼された。これを受けて、研究協力者の羽江未里、坂本安氏らと共に、彼らの研究を素材としながらその有効性について講義を行った。そこでの討論を受け、さらに本研究の接近法における新たな展開が見いだされた。

<2008 年度>

前年度の流れを踏襲して、研究(1)～(4)という形でまとめていく。

研究(1)：FTT について、昨年度は連携研究者である筑波大学小川俊樹教授らと共に、関東

地区及び九州地区での本格実施の遂行を行った。本年度は本研究の目的(3)と併せた形で、広汎性発達障害を抱える児童に対して試行をし、併せてその検査の有用性についてまとめた。そしてそれらの成果を、XIX International Congress of Rorschach and Projective Methods. におけるシンポジウム「International Researches on FTT」(2008年7月21日～26日)(於：ベルギー、ルーベン、ルーヴェンカトリック大学)にて、発表を行った。このシンポジウムは、FTT 創案者の Dr. Carina Coulacoglou 及び小川俊樹教授が企画したものである。ドイツおよびトルコからもシンポジストの発表があり、各国の研究成果を報告し、文化による相違などにも言及しながら、FTT の効用について検討をおこなった。

研究(2)：前年度に引き続き、青年の対人関係として家族関係及び友人関係の理解を進め、同時に摂食障害、解離、自傷などの問題を抱える青年の心理アセスメント、心理療法についての詳細な検討を行った。これらの成果を中心として、代表者高橋靖恵が編者となって「家族ライフサイクルと心理臨床」を出版した。さらに、これまでのロールシャッハ法における共同研究の成果を公刊企画が立案され、次年度発行に向けて研究のまとめ及び執筆を行った。また強迫性障害の認知行動療法における心理アセスメントという観点を通して、研究分担者らが中心となった研究がすすめられ、国際学会での成果発表を行った。(○Tomita M, Yoshioka K, Kawamoto M, Nakao T, Nakagawa A, Takahashi Y 2008 Changes of Rorschach responses after treatment in Japanese patients with Obsessive-Compulsive Disorder. The XIXth International Congress of Rorschach and Projective Methods in Leuven, Belgium, PROGRAM-CONGRESSBOOK ; 322.)

研究(3)：広汎性発達障害等の問題を抱えた青年の心理アセスメントについて、昨年度実施した成果とさらに新たな知見も加えて、国際学会(○Takahashi, Y., Takahashi, N., Kamio, Y., Motojima, K., Tomita, M., Suzuki, K., & Morita, M. 2008 Rorschach responses of adolescents with Asperger syndrome and high-functioning autism, using the Thinking Process and Communicating Styles Category (Nagoya University edition) The XIXth International Congress of Rorschach and Projective Methods in Leuven, Belgium, PROGRAM-CONGRESSBOOK ; 320)において成果発表を行い、心理臨床学研究にも研究論文として掲載された。

研究(4)：人間のライフサイクルの視点から、家族関係を中心とした研究を行った。現代青年の問題から発展して、若い母親の子育てについての問題や、青年期の子どもを持つ中年期の夫婦の問題を取り上げた研究が、研究協力者を中心に行われ、研究代表者と共に学会発表を行った。これらの問題を含めて、ライフサイクルの各段階における相互性に着目した。上記の家族ライフサイクルと心理臨床の著書の中においても、乳幼児期から老年期までの家族相互関係の研究が掲載され、それをとりまとめ討議することで、研究の発展につながった。

<2009年度>

これまでは、研究(1)～(4)のそれぞれが独立して進行していたが、研究が遂行されるに従って、現代の児童・青年の対人関係の諸問題として、健常者から神経症圏、パーソナリティ障害、精神病圏の問題及び器質的に障害を抱えた児童・青年たちへと幅広い援助に対する検討が積み重ねられてきた。またそれぞれの研究成果について、成果発表が蓄積され、著書などにまとめて行く作業となった。なお、本年度は、すべての研究が研究代表者および研究分担者、連携研究者、研究協力者によって総合的に行われ、まとめの作業が進められた。

研究(1)：筑波大学の小川俊樹教授との協議により、日本で実施されたデータおよび日本語におけるマニュアル版を出版する準備に取りかかることとなった。さらに幅広く心理アセスメントの展開として、日本での邦訳、紹介のなされていない書籍の翻訳版作成準備も行っている。本作業はまだ完成をみていない。研究機関終了後も引き続き進めて行くこととなっている。

研究(2)および(3)：長期間継続して行われた共同研究の集大成として「実践ロールシャッハ法(森田美弥子・高橋靖恵・高橋昇・杉村和美・中原睦美)」の執筆から出版への作業を行った。それに伴って、スイス・ベルンのThe Hermann Rorschach Archives and Museum(ロールシャッハミュージアム)の視察を行い、今一度ロールシャッハ法の成り立ち、臨床的有用性を検討し、ロールシャッハ法の歴史と今後の臨床的活用における今後の発展への資料収集を行った。これは、大変有意義なもので、この出版で本研究が終わることなく、さらに展開していくための大きな示唆を得ることができた。また、本書は国際ロールシャッハミュージアムにも保管される運びとなった。

また、広汎性発達障害の研究として、成人期まで問題の発言に至らず、成人になって複

合的な問題を呈した事例との取り組みから、より早期の発見、適切な心理支援の方向性を検討し、日本ロールシャッハ学会において成果発表を行った。そこでは、本研究のまとめとして、複数の心理検査によるテストバッテリーの組み方、その施行順も含めて、「多次元アセスメント」の有効性を論じ、実践活動への広がりを検討することができた。

研究(2)および(4)：これまでの研究をふまえて、「青年期問題と家族ストレス」として、日本家族心理学会編集による家族心理学年報「家族のストレス」にその成果を執筆した。現代日本における家族関係の諸問題は日々新たな課題が注目される状態にあり、今後さらなる研究の発展が必要と考えられた。

そして、今後の研究の発展に大きく寄与する視察として、「心理療法と投映法の総合的活用」の研究のために、英国、タビストッククリニック、ロンドン大学キングスカレッジ精神医学研究所・ベスレム王立病院を訪問し、英国における精神分析学的心理療法および、認知行動療法の進め方について見聞を広め、そこでの心理アセスメントの活用についても示唆を得た。今後、幅広い対象者への心理アセスメントおよび心理療法の研究をすすめる上で、大変有意義な視察であった。本研究のまとめから次の研究への展開に大きなステップとなった。

これらの4年間の成果は、その資料と共に冊子媒体の報告書にまとめることができた。以下に述べる成果一覧にも掲げるが、本研究の期間内に、3冊の編著を著すことができた事は極めて大きな成果といえる。多数の共同研究者に支えられて、これらの成果をまとめることができたことを心から深謝する次第である。この期間の研究をもとにして、さらに、国際的な視野に立った、メンタルヘルスの問題、心身の諸問題に対する心理的支援のみならず、予防的な活動に向けて発展を重ねて行きたいと思っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 31 件)

- ① 高橋靖恵、神尾陽子、青年期アスペルガー症候群のロールシャッハ-高機能自閉症児事例との比較検討-、心理臨床学研究、査読有、26(1)、2008、121-122
- ② 神尾陽子、アスペルガー症候群の概念：統合失調症スペクトラム障害との関連における概念の変遷と動向、精神科治療学、査読有、23、2008、127-133
- ③ 富田真弓、吉岡和子、河本 緑、強迫性

障害のロールシャッハ反応の治療前後比較—情緒体験の在り方の焦点を当てて—、ロールシャッハ法研究、査読有、12、2008、11—22

- ④ 高橋靖恵、中園照美、家族の心理アセスメント、現代のエスプリ別冊 臨床心理査定セミナー、査読無、2007、249-261
- ⑤ 高橋昇、慢性患者の描画の変化と常同性—相互なぐり描き法と風景構成法を用いて—、心理臨床学研究、査読有、24 (5)、2006、525-536
- ⑥ 西見奈子、自我境界および感情構造が恐怖体験に及ぼす影響—身体像境界得点と感情カテゴリーの分析から—、ロールシャッハ法研究、査読有、10、2006、66—78

[学会発表] (計 35 件)

- ① 高橋靖恵、長崎千夏、(2009) : 発達障害を抱える成人事例のロールシャッハ法・見立てに関する検討—「テストバッテリー」と「医師との連携」—の視点から、日本ロールシャッハ学会第 13 回大会、2009/10/31、東京
- ② Takahashi, Y.、Takahashi, N.、Kamio, Y.、Motojima, K.、Tomita, M.、Suzuki, K. & Morita, M.、Rorschach responses of adolescents with Asperger syndrome and high-functioning autism, using the Thinking Process and Communicating Styles Category (Nagoya University edition) The XIXth International Congress of Rorschach and Projective Methods、2008/7/22~25、Leuven, Belgium
- ③ Dr. Coulacoglou, C.、Prof. Ogawa, T.、Dr. Takahashi, Y.、Dr. Kleinemas, U. & Prof. Ikiz, T.、: Symposium: International Researches on FTT The XIXth International Congress of Rorschach and Projective Methods、2008/7/23、Leuven, Belgium

[図書] (計 10 件)

- ① 森田美弥子、高橋靖恵、高橋昇、杉村和美、中原睦美、ナカニシヤ出版、実践ロールシャッハ法、2009、171 頁
- ② 高橋靖恵、金子書房、「青年期問題と家族ストレス」『家族心理学年報 27 家族のストレス』日本家族心理学会 (編) 2009、42-53
- ③ 高橋靖恵 編、金子書房、家族ライフサイクルと心理臨床、2008、143 頁

[産業財産権]

- 出願状況 (計 0 件)
名称 :

発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :
○取得状況 (計 0 件)
名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 靖恵 (TAKAHASHI YASUE)
京都大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号 : 90235763

(2) 研究分担者

神尾 陽子 (KAMIO YOKO)
国立精神・神経センター・精神保健研究所・児童・思春期精神保健部研究院・部長
研究者番号 : 00252445
吉岡 和子 (YOSHIOKA KAZUKO)
福岡県立大学・人間社会学部・講師
研究者番号 : 30448815

(3) 連携研究者

高橋 昇 (TAKAHASHI NOBORU)
人間環境大学・人間環境学部・教授
研究者番号 : 10441619
(H18→20 : 研究分担者)
松崎 佳子 (MATSUZAKI YOSHIKO)
九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号 : 30404049
(H18→19 : 研究分担者)
森田 美弥子 (MORITA MIYAKO)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科教授
研究者番号 : 80210178
(H18→19 : 研究分担者)
西 見奈子 (NISHI MINAKO)
近畿大学九州短期大学・保育科・准教授
研究者番号 : 10435365
(H18→19 : 研究分担者)
小川 俊樹 (OGAWA TOSHIKI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号 : 60091857
(H19 : 研究分担者)